

「世間心理学」覚え書

押見輝男

社会心理学、なかでも心理学的社会心理学においては、「世間」の概念はこれまで長く等閑視されてきた。世間という概念は特定文化の中でのみ通用する俗語で非科学的であり、しかも今日の意義も乏しいとみなされてきたふしがある。実際、世間が関与する現象は流言、流行、世論などの研究テーマとして分析考察されてきたが、「世間」をこれらの現象の記述概念、説明概念として用いた研究は管見に入らない。

このような研究状況の中で中村（2011）は、Heider（1958）のナイーヴ心理学のアプローチに準拠して、「世間」が個人と社会の相互交渉過程において規定因の影響を行使しており、その事実は欧米の社会心理学の研究結果を理解する面でも重要であるとする「世間心理学」を提唱した。本論文はこの「世間心理学」がもつ特徴を明らかにするため、そのアプローチの位置づけ、関連類似概念との比較、世間の理解を促進すると思われるパースペクティブの提示を試みるものである。

「世間心理学」の位置づけ

世間の概念が心理学的社会心理学の分野で注目・重視されなかった理由として考えられる研究上の背景要因は、現代社会心理学の潮流である。現代社会心理学は、普遍的現象と実験的分析の重視と、アメリカの研究に顕著である対人過程（interpersonal process）への還元主義・個人内心理（intrapersonal）中心主義とを学問的理念的特徴として有してきた。世間の概念は固有文化特殊的で普遍性に乏しく、歴史的制約の色彩（封建性）を帯びたものと受け取られやすかった。そのため世間そのものを中心に据えた研究は生まれにくかったといえる。今日、社会心理学は従来の潮流のアンチテーゼとして、文化心理学が隆盛し、方法論的には実験室的実験からの解放が進み、またヨーロッパを中心にして対人過程に代わ

る集団間過程 (intergroup process) に準拠した研究が勢力を確立している。その意味では、世間の概念の復権を促す状況が現出しているといえるが、新たな「世間心理学」の提唱は今日の状況に後押しされた固有文化的現象としての世間の復権をめざすものではないことに、まず留意すべきであろう。

世間心理学の基調となる分析の文脈は、あくまでも個人と他者の心理的交流を問題とする対面場面である。対面場面の相互関連交流過程において、個人にかかわる過程として「ワタクシ (私)」^{注1}、他者にかかわる過程に「世間」^{注2}を導入することにより、従来のパラダイムである〈自己-他者〉の対人過程の理解を深めることが意図されている。ここでの「世間」とは、個人に対して評価・抱排・規制の3機能を行使する、実態として把握可能な構成概念であるとされ、しかもその機能は代弁者たる「他者」を介して実行されると考えられている。世間心理学は対面場面の中に世間を取り込んだところに、換言すると二者関係の中に集合現象を含めた点に他のアプローチにはみられない独特の特徴が認められる。

注1) 中村は「私」の文字を使い、「わたくし」とルビをふっている。「私」は文学的な記述用語ではないことを強調するためと思われる。本稿では、「ワタクシ」のカタカナ表記を用いる。

注2) 世間にあたる英語の用語としては、world のほかに the public もある。

「世間」の類似概念

世間心理学の「世間」と類似した性質をもつと思われる概念は、複数存在する。世間の三つの機能は、大きく括ると、規準 (standard)、規範 (norm) の機能といえる。社会的性質を帯びた規範機能を扱っている既存の代表的な概念は、一般化された他者 (generalized other) である。Mead (1934) は、他者の行動様式、態度、価値観が役割取得により個人の中に取り込まれて内在化した規範体系を、一般化された他者と命名して、これを人の行動の社会化の本質とみなした。一般化された他者は、個別的他者性という特徴を有せず、規範機能を行使するとみなすところに世間との類似性が認められる。しかし、世間心理学における「世間」は、個人に内在化された規範体系というよりは、不特定多数者の支持・共有する規範・常識による準拠的影響を代弁者たる他者を通して発揮する、あくまで対人状況的な構成概念である。

公正世界仮説 (just-world hypothesis)、文化的世界観 (cultural worldviews) も、世間と類似した概念である。Lerner (1980) は、人には、自分の住む世界は正当性、公平性の秩序が支配しており、正しい者にはよい結果 (報酬) が、悪

しき者には悪い結果（罰）が随伴するはずであるとの信念が存在するとし、この因果応報的な内容の信念を公正世界仮説と名づけている。公正世界仮説は世間に存在する特定の具象的な規範意識とみなすことができる。文化的世界観とは存在脅威管理理論（terror management theory; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991）の中で提唱されているもので、個人が内在化した宗教的、政治的、社会的イデオロギーを意味し、公正世界仮説よりは広義の信念体系である。存在脅威管理理論では、人が自分の死およびその不可避性を自覚したさいの恐怖心を緩衝しようとして、文化的世界観を墨守し絶対視するとされている。来世に関する宗教的世界観、政治体制や国家の優越性に関する世界観への固執は靈魂の継続性を心理的に保証し死の恐怖心を軽減することができる。この文化的世界観は複数同時に存在するとされている点や、準拠枠として機能する点で世間概念に近いといえる。ただし、世間心理学における「世間」は単なるイデオロギーではなく、不特定多数者の動向や日常的常識・慣習をも含み、状況によって変動・流動しやすい性質を有するものであり、より広義の上位概念であるといえる。

面子・面目（face）という概念は、自己呈示（self-presentation）や対人コミュニケーションの分析において、文化の違いを超えて重要視されている心理学用語である。この概念は、いわゆる「世間体」と同義的に用いられている。しかし、面子は自尊感情（self-esteem）、とくに公的自己（public self）に対する考慮・尊重を意味するものであり、世間心理学の「世間」よりは個人過程（ワタクシ自己）の方にかかわるものと位置づけるべきである。

Lewin (1951) の場理論における生活空間（life space）は、所与の瞬間における個人の行動に影響を及ぼす全体状況を意味し、それを表現する概念である。世間心理学が扱う現象は、生活空間のトポロジカルな表現で、すなわち、代弁者たる他者を生活空間内の分化した一領域として表すことで記述できるともいえる。しかし、生活空間として記述された状態は、観察分析対象としての個人の私的で内的な心理学的世界であり、世間心理学が追求する対人交渉過程を記述するものではない。世間心理学は、生活空間の成立する基底過程の状況、力学を扱うものである。

おそらく「世間」との類同が最も興味深い概念は、同じく Lewin が提唱した、社会的風土（social climate）であろう。社会的風土は継続的集団が有する特有の雰囲気（group atmosphere：集団雰囲気）のことで、成員間の相互作用により醸成され、成員の行動に対して規定因的な影響を及ぼすとされる実態的な構成概念である。Lewin グループによる実験では、社会的風土はリーダーの成人と10歳児からなるクラブ活動場面におけるリーダーのリーダーシップスタイルの

違いとして操作された (Lewin, Lippitt, & White, 1939)。世間心理学的にみると、リーダー役が代弁者的役割を担っていたと解釈できるかもしれない。社会的風土は一般的には「社会・集団の成員の生活態度を規制する無定型な全体的雰囲気」(社会心理学小辞典 有斐閣)と定義される。しかしながら、世間心理学における「世間」は、二者関係や集団内関係を全体的に色づける要因ではなく、行動規範や常識のサンプルとして具象的内容性の強い要因であり、社会的風土とは似て非なるものといえよう。社会的風土に関するその後の研究進展は活発ではなかったが、世間心理学は社会風土の概念の再生、世間との関係分析を刺激するかもしれない。

ワタクシと自己の分割的扱い

世間心理学では、個人にかかわる側面においても独特の特徴が認められる。それは、従来の自己 (self) の概念を「ワタクシ」と「自己」とに分割している点である。社会心理学における自己の関連概念は夥しい数に及んでいる。その原因の一つは、自己の二重性にある。自己は、認識・行為の主体も自己、認識・意識の対象 (客体) も自己という、二重性を含んだ多面的様相を呈する概念である (James, 1892)。中村 (1990) は、自己関連の既存の諸概念を自己過程 (self-processes) の4段階 (注目-把握-評価-表出) に位置づけたが、この自己過程説の中では自己の二重性の扱いは未分化であり、客体としての自己に考察の中心があって、主体としての自己は暗黙の前提として取り扱われていた。同じ特徴は、自己を鍵概念とした行動理論である Duval & Wicklund (1972) の自覚状態理論 (self-awareness theory) においても認められる。この理論では注意を自己に向けることとその後を生起する心理的過程が考察されているが、自己に注意を向ける主体としての自己は論考の対象ではなく、自明の存在としての扱いであった。

この自己の二重性の未分化な扱いの問題点は、近年とくに重視されるようになった自己の実行機能 (executive function) の定義の問題に顕現化している。自己の実行機能の具体例は自己コントロール (self-control)、自己制御 (self-regulation) であるが、その典型的な定義は、“the exertion of control over the self by the self” (Muraven & Baumeister, 2000) である。この定義の中の2つの self の違いは何か、という問題にこれまで明確に答えた言説はなかった。世間心理学では主体的機能を担うものとして「ワタクシ」、他者との直接的交流の中に現出するものを「自己」として分けて考え、ワタクシは自己の管理者、自己は

ワタクシに対する情報提供とワタクシの代理者として機能するとされている。自己コントロールの定義中の self はワタクシと自己なのである。ワタクシは、従来の自己研究で明らかにされてきた自己関連現象の主体という抽象的役割ではなく、自己過程のコントロール源としての役割を担う、自己の実行機能の具体的な執行者である。ワタクシという構成概念には、世間の影響に対して個人が決して無力で依存的な存在ではなく、主体的で選択的な力を行使しうる存在であるとの人間観が反映されている。その意味で社会心理学の自己研究においてワタクシを暗黙の存在として扱って軽視すべきではない。そもそもワタクシは、James (1892) のいう主我 (the I) に近い概念であるが、James の主我の考察が意識の流れの特徴分析に終始していたのに対して、世間心理学では対面場面で状況をコントロールする主体的存在として位置づけられ、主体的自己のもつ社会性という特徴が前面に保持されている概念といえる。

ワタクシ-自己の二分説との関連を考える上で興味深い既存の自己分割説は、私的自己 (private self)-公的自己 (public self) の二分説 (Buss, 1980) である。私的自己は他者が直接観察することのできない内面的、私的自己側面と定義され、私的自己に注目しやすい者 (私的自己意識-高群) は主体的、自律的に反応する傾向を顕著に示すことが判明しており (押見, 1990)、そこにはワタクシの機能が反映していると思われる。これに対して公的自己は他者から直接見られている自己側面で、公的自己を意識しやすい者 (公的自己意識-高群) は他者の影響を受けやすい行動傾向を有しており (押見, 1990)、公的自己は世間心理学において対面場面で他者と直接交流する役割の自己に近いとみなすことができる。無論、両二分説は分析視点も適用文脈も異なり対応関係を考える際には留意が必要であるが、類推による新たな仮説問題構成も可能である。たとえば、私的と公的の自己意識の強さの相関は、.30-.40 台である。この相関の値はワタクシと自己の密接な関係の傍証とみなせるし、反対に、両者の相互の自由度を反映しているとも考えられる。オリジナルの自覚状態理論では当初、注意が強く自己に向けた客体的自覚状態 (objective self-awareness) の反対の状態を主体的自覚状態 (subjective self-awareness) とし、主体的自覚状態では行為者としての自分の意識が背景的に保持されているとされていた。このことはワタクシと自己は常につよく連携した関係にあるとは限らないことが示唆されている。ワタクシと自己の関係の性質、ワタクシによる自己の管理の強さに関する問題は、世間心理学の今後の研究課題の一つとなろう。

図/地パースペクティブ

世間心理学における＜他者-世間＞の関係は、図/地 (figure/ground) の枠組で考えることができるとされる。対面場面における通常の二者関係では個人と他者の閉ざされた関係が主となり、世間は地として背景に沈み意識されることはない。しかし、他者が世間の代弁者の役割を行使すると、世間が図となり、代弁者の個別固有性は地として背景に隠れるといえる。たとえば、「そのような服装では世間の物笑いになる」と忠告する他者は、服装についての自分の評価や考えをあからさまには表明しない。世間と同一見解であることが示唆されているといえるが、個人的見解があいまい化されていることは確かである。世間を代弁するという対人的影響方略の選択動機は、その後の状況展開の不測性に対する事前対処、防衛なのであろう。影響の受け手が影響の試みに対して同意しても反発しても、関係を維持する上で対処しやすいようにしておく防衛的な配慮が働いているのかもしれない。

また、他者が世間を持ち出して代弁しようとする動機の発生には、自分と相手との関係の存立を保障している背景条件、すなわち、日常生活の維持を可能とさせている「地」としての社会空間（世間）への脅威があるとも考えられる。大震災の後に一般的な親和傾向・援助傾向が強まるのは、大きな天変地異により社会空間の存続への脅威を覚え、世間が「地」から「図」に代わる図地反転現象によるとみなせるであろう。

まとめ

社会心理学は、個人の生活の場（社会空間）を構成する多数の不特定-匿名他者の存在の影響を見落とすか軽視してきた。その原因は行動現象についてのナイーブ心理学による内容把握が不十分であったためであり、また、対人過程還元主義・個人内心理機能重視により、世間の影響が＜他者の効果＞、＜内在化された規範の効果＞として取り扱われてきたためといえる。分析・考察の精緻化が科学の進歩の過程であれば、「世間」の影響を正当に評価し考察すべき時を迎えている。

世間心理学の主張を敷衍すると、次のような結論を導き出すことができるのではないだろうか。

世間は俗念や固有文化的現象ではなく、世間ないし世間的なものは文化の違いを超えて遍在する。世間ないし世間的なものは、対面場面において実体として存

在しているのではなく、具体的な日常生活の背景として存在する。すなわち、世間は具体的な人間関係の基盤である社会空間にかかわる構成概念である。対面場面における行動は、個人および重要他者 (significant others) や一次集団成員 (primary group members) の固有属性に規定されるだけでなく、背景条件の社会空間としての世間の影響を代弁者たる他者を通して受けている。世間は他者によりその存在が顕現化されるので、心理学的には世間は1つではなく、複数あり得ることになる。この世間の影響に対して、個人はワタクシによって自己を介して主体的、選択的、戦略的に対処している。

世間心理学は対面場面の心理学の新たな展開、拡張なのである。

引用文献

- Buss, A.H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Duval, S., & Wicklund, R.A. (1972). *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (ハイダー/大橋正夫 (訳) (1978). 対人関係の心理学 誠信書房)
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer course*. New York: Holt. (ジェームズ/今田寛 (訳) (1992). 心理学 (上・下) 岩波書店)
- Lerner, M.J. (1980). *The belief in a world: A fundamental delusion*. New York: Plenum.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social sciences*. New York: Haper & Row. (レヴィン/猪股佐登留 (訳) (1956). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Lewin, K., Lippitt, R., & White, R. (1939). Patterns of aggressive behavior in experimentally created "social climates" *Journal of Social Psychology*, 10, 281-299.
- Mead, G.H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press. (ミード/稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) (1973). 精神・自我・社会 青木書店)
- Muraven, M., & Baumeister, R. F. (2000). Self-regulation and depletion of limited resources: Does self-control resemble a muscle? *Psychological Bulletin*, 126, 247-259.
- 中村陽吉 (1990). 「自己過程」の4段階 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- 中村陽吉 (2011). 世間心理学ことはじめ 東京大学出版会
- 押見輝男 (1990). 「自己の姿への注目」の段階 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: On the psychological functions of self-esteem and cultural world-views. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social Psychology*, Vol. 24. San Diego, CA: Academic Press.